

本文章はテレビ新広島文化大学の講演を受けて書かれたものではないが、その内容が「学問の散歩道」にふさわしいと思われるので、ここに収録した。

長善寺見学記

金田 晋

(1)

私が「長善寺」というお寺の存在を知ったのは、野間宏と沖浦和光の共著『日本の聖と賤—近世篇』（人文書院、1986年）においてであった。1576年、三島村上水軍が毛利水軍と連合して、大阪石山寺に兵糧補給の救援に出陣した。水軍は、7月12日泉州貝塚に姿を現し、翌13日には木津川川口に到着して、15日に織田軍と決戦する（野間書63頁）。決戦に臨んだのは800艘、一艘の乗員20人前後とすると、約1万6000人が参戦した、と野間書では計算されている。だが『信長公記』では「大船800艘」とある。水軍の船の種類は、巨大な50～100挺立の安宅船や40～50挺立の関船なども当然加わっていたであろうから、もっと大人数の水軍であったにちがいない。実際の戦闘態勢は既に4月にはじまっていて、14日石山本願寺は挙兵し、信長もそれに対応してただちに戦列を整えていた。5月3日、三好康長、原田直政を立てて、本願寺派の木津砦を攻めようとしたが、惨敗した。一方、5月6日に総大将村上武吉以下村上水軍の闘将たちは大三島の大山祇神社に参詣して、「万句連歌興行」を開始する。武吉の子元吉が発句者になり、25日先陣として出陣していった。約2ヶ月かけて7月5日ついに万句満願するが、この興行を締めくくったのは総大将武吉であり、かれはただちに出陣して行った（野間書63頁）。決戦は7月15日であった。

中世の階級社会では、漁労や廻船業、運輸等に従事する階層は農民よりも低い地位にあった。かれらの仕事は過酷であったろう。だが一方で、村上水軍は砲術、火術にすぐれていて、織田の軍勢を打ち破ったのも投げ焙烙という火器を使用したからだという。これは陶器の壺に火薬を仕込んで爆発させるものであり、かれらは何種類もの焙烙をもっていたという。おそらく海外貿易を通じて最新の火薬の技術を身に着けていたであろう。しかもその海を舞台に展開するかれらは、異国、異地域のいろいろな職種、階層の人々と交流し、土地に貼り付けられた武士や農民たちには得られない知識、技術、言語にふれていたはずである。また複雑な地形、海底の状況、潮の流れ、気象の変化を読み解きながら、大小の舟を見事に運行させてゆく水先案内の役を引き受けてゆく技術を身に着けていた。歌を詠み、連句をひねる風流をたのしむ集団であった。

村上水軍の家系図は多く、親清、顕家、師清とつづく北畠家を先祖とし、そこから村上源氏につながってゆくという。その伝承が説得力をもつ集団であったと言える。

武吉で仕上げられるこの「万句連歌興行」は、村上水軍の決死行の覚悟を秘めたことにはちがいないが、だからといってかれらの覚悟だけが先立つ初体験的試みだったなぞと思ってはならない。大山祇神社は、山の神、海の神、イクサの神を祀る神社として古来公家や武士の参拝する一種の聖地であり、河野通信、源頼朝、義経など名立たる武将たちが今では国宝の指定を受ける豪華な鎧兜を奉納してきた。そしてここは三島村上水軍の拠点でもあり、文政2（1445）年以来「三島宮法楽連歌」が毎年奉納されてきた、そこには初期こそ河野家が中心であったが、やがて村上水軍の面々の名前も出てきて、そこに時宗の僧侶や民衆の名前も出てくる。（野間書54－6頁）。

そのような文化的環境を背景に、私たちは、一見無謀とも見える大阪石山寺への救済戦争の成功を確信に導く深い戦略戦術が計算されていたであろうことを推測する。

(2)

この村上水軍の救援に道筋をつけたのは、沖浦家が菩提寺とする今福山市鞆の浦にある明円寺の前身、鞆の関町にあった法泉寺十代住職長存であったという。石山本願寺は宗主顕如が君臨し、全国の一方向門徒の頂点にあったが、1570（元亀元）年以来織田信長軍の包囲を受け、必死の防戦をつづけていた。全国から門徒衆が、顕如の檄に応じて応援にはせ参じるが、やがて城内の兵器、兵糧の欠乏が深刻になる。また、石山寺と連帯して織田軍に立ち向かった下間頼旦を総大将とする伊勢長島の一揆も71年、73年、74年の3度の戦いを経て、ついに敗戦し、その兵たちもおそらく最後の一戦を覚悟してこの石山寺とその周辺の砦に集結していた。糧食や兵器の不足は輪をかけていたであろう。そのような状況下で、顕如は西国の大名毛利に救済の願状を発した。法泉寺長存はその伝令であったのだろう。長存も参戦するが、帰郷後、顕如の長子教如から感謝状が届き、「松江山明円寺」という号を下賜されたという。（村上正名『福山の歴史』歴史図書社、野間書11-12頁から転引用。）

だが石山本願寺合戦は、一方で織田信長と顕如を総大将とする門徒軍の戦いであるとともに、他方で、農民や商人等の武士支配に対する一向一揆という様相も呈していた。

時は室町時代末期である。16世紀、世界が動いていた。商業都市堺があって南蛮貿易の拠点となっていた。フランシスコ・ザビエルをはじめ多くの宣教師が日本にやってきて、戦国大名をはじめ多くの武人、町民をキリスト教徒に改宗させ、それより何倍も多い異国の商人たちが利権を求めて、町の雑踏の中に入って行った。町には経済活動を支える近代的商業システムが形成された。しかも国内の新興商人たちは国内での販路を開くだけでなく、積極的に海外に雄飛していった。農村でも飛躍的な技術革新があり、生産力が高まり、文化意識が向上した。この時期各地に一向一揆が起こる。だがこの一揆を私たちは生活窮乏の農民たちが苛斂誅求に対して思い余って蜂起した、たんなる経済的暴動などと片付けてはならないだろう。長善寺住職大内亮文師は「農民たちの生活と自由を訴求する戦争」とよぶ。世にほぼ同時期に起こったドイツ農民戦争(1524～25年)は名高い。それに匹敵する戦争であったのではないか。浄土真宗をはじめ新興の仏教は、こうした時代の思想表現であった、と言って過言でない。1466年、近江で最初の一向一揆があり、以後、越中、加賀、機内、三河など各地でおこり、1582年加賀・鳥越の戦いで終わる。

石山本願寺は「寺」とはいえ、城郭を築き、難攻不落の城であり、法主は戦国大名の性格も備えていた。現在の大阪城本丸の地に建っていたと言われる。

(3)

その石山寺合戦を伝える遺品が竹原の長善寺に、今も寺宝として所蔵されているという。

だが広島でも、そのことを知る人は少ない。『広島県の歴史』（旧版、後藤陽一著、山川出版社、1972年）には、安芸門徒が「毛利水軍の援助をえて」、「籠城に悩む石山に多量の食糧を送ったことが伝えられている」（以上、同書152頁）という記述をしている程度で、村上水軍への言及がない。村上水軍が取り上げられるのは、毛利元就が陶晴賢を厳島で滅ぼす際に毛利方を応援したという功績についてだけである（以上、同書81頁）。博物館に関しては、資料は少し古いが、広島県立歴史博物館が発行する『広島県立歴史博物館展示内容』（1989年刊）に例の旗ざしが写真で示されている。それは「黄旗（安土桃山時代）」という題で紹介されているが、「安芸国竹原周辺の真宗門徒が石山本願寺と織田軍との戦いに参戦した時の軍旗」とキャプションがつけられているだけで、素っ気ない。所蔵先の名は伏せられている。最近、因島や今治市に村上水軍

を顕彰する博物館ができ、少しずつ村上水軍の全貌が明らかになっているが、長善寺の名は知られていない。

それを知ったのは、上記の野間書においてであった。だが長善寺の所在地は「竹原」とあるが、竹原のどこにあるか。それを捜してこの寺宝はぜひ見せてもらいたいと思った。私の住む地区（東広島市西条土与丸）の常会に本業が酒樽菰づくりである藤岡忠明さんという長老がおられる。地域の世話を長年にわたってされてきたが、この地域の歴史にも詳しい方で、私は親しい。地区の環境対策の相談に訪問したとき、ふと私は竹原の長善寺のことを話題にした。ところが、かれはそのお寺の檀家であると言う。紹介しようと言ってくれた。そのような縁でかれに橋渡しをしてもらい、長善寺拝観がようやく実現したのである。8月31日のことであった。

私はこの拝観を広島大学教職員OBで東広島市在住の者で構成される広島大学マスターズの見学会として企画し、仲間13名と拝観した。正午にJR山陽本線西条駅に集合し、国道2号線を東行すること40分、それから竹原市街地の方向に折れて5分ほどで、同寺に着いた。

13時本堂にあがる。第20代住職大内亮文師から一向一揆の魂を今に伝えるこの寺の「縁起」をうかがった。大内師は、いただいた名刺には「一向一揆、安芸門徒の寺、浄土真宗本願寺派長善寺」と肩書されておられる。長年の踏査で得た識見をもとに蘊蓄を傾けた40分の講話であった。別室に席を移し、寺宝2点を前に、石山寺合戦に挑んだ老将藤原忠左衛門に焦点を当てた解説をいただいた。



(4)

長善寺の寺宝とは、「進者往生極楽、退者無間地獄」と大書されたタテ88センチ、ヨコ66センチの麻製の旗ざし「黄旗」と翌年尼崎砦で討死にした19名の檀家の法名簿のことである。この2点は、おそらくこの国の歴史において最初で最後と言って過言でない、民衆の力が裸形で突出した一向一揆「石山農民戦争」（大内住職の言）の貴重な証しである。血に染められた旗ざしのちょうど「獄」にあたるところに、虫食いのあとか、大きなほころびがあった。この旗ざしは何時使用されたのか。また19名の討死する尼崎砦は、合戦の中で、どのような意味をもっていたのか。

1576年、宗主顕如は西国の毛利方とすべての門徒衆に救援の檄をとばしていた。今「週刊新潮」で和田竜が小説「村上海賊の娘」を連載している。最近の月号では、村上武吉の娘景が本願寺に救援物資を届けようとする門徒の廻船に上乗りして大阪泉州の淡輪沖あたりに達した時、真鍋七五三兵衛の船団に取り囲まれる。真鍋水軍は、太平洋に通じる3里たらずの友ヶ島水道の本州側、

東の門扉「真鍋関」を守り、船の運航を監察していた。七五三兵衛はその水軍の統領であり、『信長公記』によれば、信長から大阪住吉の海岸沿いに砦を築き、海上警備をまかされる勢力を誇っていた。その面では、門徒やそれを応援する村上水軍とは敵対関係にあり、景の上乗りする廻船は直ちに撃たれて当然であったが、小説では、海賊同士の海上交通上の掟があり、本願寺への荷送を認められる一方で、七五三兵衛の案内で、木津、天王寺砦を案内される様子が描写されている。フィクションを交えながらも、さまざまな文献を駆使して、よく調べている小説で、その頃の情景がよくわかるので、私は愛読している。

さて、『信長公記』によれば、信長は76年4月に挙兵した石山本願寺を撃つために、尼崎から野田（荒木村重）、東南の森口（守口）と森河内（東大阪市）（明智光秀、細川藤孝）、南の天王寺（原田直政）にそれぞれ砦を築いて警固を固めることを命令する。このように見ると、今の大阪城の位置上本町にあった石山本願寺への攻撃は相当遠巻きにして真綿で締め付けるように、軍を配置していたことがわかる。寺のまわりの麦畑を焼き払うように命じ、また天王寺砦によって本願寺側の楼岸（大阪市中央区）、木津（大阪市浪速区）の砦を通して開かれている海路を絶とうとした。ともかく、5月から戦端は開かれていて、信長は両砦の攻略を命じるが、本願寺側は雑賀衆の鉄砲隊を待ち伏せさせ、第1陣の三好康長が撤退、第2陣の原田直政も苦戦、本願寺側の増兵によって総崩れになり殲滅し、討死した。その後信長自身が陣頭に立って、反撃に転じ、漸く天王寺砦を死守した。このような戦況を背景に、7月毛利水軍、村上水軍が800艘の船団を組み、頭如からの要請にこたえ大阪に攻め上り、木津河口に上陸、織田軍を撃破して10万石の兵糧を見事に届けたのである。



(5)

頭如が発した檄にこたえるために、長善寺三世住職円生は、檀家の一人藤原忠左衛門に一隊を組織して、村上水軍に加わることを依頼した。檀家の中の稀少の戦闘経験者であったのだろう。

長善寺はその頃西野村にあったが、かつてその北方には篠原城があり、この地方を守っていたと伝えられる。だがそのとき既に城はなかった。今ではその城跡も、城があったとされる上野村という地名も地図から消えている。この篠原城に忠左衛門は若いころ武士として出仕し、同じく武士であった同寺の開基善恵とはかつて義兄弟の契りを交わした仲であった。だが2人はある時武士であることを辞め、善恵は出家し、やがて長善寺を開いたが、忠左衛門は大三島の南西部の荒

廢地口総に土地を得て農民の道を選んだ。進む道はちがったが、交友はつづいたであろう。忠左衛門の農民生活も既に50年になっていた。寺の三代目住職円生の願いを受けて、兵を集めて船を出した。おそらく80歳を越えていたはずである。だが出陣を決めたのは、檀家であったという寺のよしみからだけではないであろう。大三島の南西端の荒廢地を農地にするのは、自分たちだけでは大変だったろう。もちろん島の狭隘な平地だけでは生活するだけの収入は得られない。海に出て魚介や海草を採り、ときには水軍の下働きもさせてもらわなければならなかったはずである。大三島を総本山として、瀬戸内海の交易、水先案内、漁業を差配する村上水軍の傘下であって、忠左衛門一族はようやく生活が可能であったろう。その水軍が出陣する。その陣営に加わることは、一族の現在の生活を守るためにも、しなければならないことであつたらう。

船の舳先には「進者往生極楽、退者無間地獄」と大書された旗ざしが掲げられていた。「進まば往生極楽、退かば無間地獄」とふつうにはそう読める。そしてその句には、決死の覚悟がこめられていることがよくわかる。しかもそこにはたんに忠左衛門一人の運命というよりもかれについて口総で百姓をして暮らす一族郎党の運命がこめられていたであろう。

かれらの兜の正面に「南無阿弥陀仏」の札がかざされていたという。「南無阿弥陀仏」は門徒の念仏である。そこには、門徒衆が、現世に住む自分たちの力では達成できない運命のようなものを、仏法という宇宙の摂理にまかせようという他力の本願がこめられている。だが「進者往生極楽、退者無間地獄」のスローガンにはそのような超越的なものにすがる諦念のようなものは感じられない。逆に生身の人間が全身意志の塊にして前方に進もうとする、その痛切さが響いてくる。かれらのもとには長島一揆で、何万という老若男女が無残にも殺戮された悲報が既に届いていたであろう。もし自分たちが弱気を起こして後ろを見ることがあれば、自分たちだけでなく島に残してきた自分たちの家族や仲間も殺されてしまう。現世で生きてきた自分たちの苦勞と喜びがすべて消えてしまってよいのか。身体の一挙手一投足に響く生の声が聞こえてくる。

大内師は言う、信者は生前「南無阿弥陀仏」を唱えることによって、死後極楽浄土に行けると説いている。そのことは既に約束されているはずだ、と。このスローガンにはそれ以上の思いがこめられている。かれは「顕如のいう破邪顕正の語法意識」に加えて、「農民の生活と自由を賭した戦いの決意をみる」と言う。一向一揆の精神を読み取っておられる。私は大内師にこの旗は他の門徒たちもかかっていたのか、と問うた。大内師は、これ一つだ、おそらく忠左衛門が書いたのであつたらう、と答えられた。

だがそうなら、さらに一步踏み込んで、私は次のように読んでみたくなつた。旗ざしに書かれた文字を、先入見をはずして読み直してみる。「往生」の「往」にあたるどころ、「イ（ギョウニンベン）」につくツクリは「主」ではなく、「生」と書かれている。漢和辞典にそのような文字はない。生への思いが過剰につのって誤ってそう記してしまったのか、あるいはあえて意識してそう記したのか。いずれにせよ、誤字にこめられた思いを受け止めると、「進マバ生キテ生キテ楽ヲ極ム」と読みたくなる。進みきつたその先に、かれらは郷里で妻や子や仲間たちと生きることを思い、その現世に楽の極致を夢見たのではないか。「極楽」は、昨日までそこで暮らした現世にあつたのではないか。また「無間地獄」は旗ざしでは「無」ではなく、その古辞「无」がつかわれている。蓮如の書「南無阿弥陀佛」の「無」も「无」と書かれる。「無間地獄」とは、諸橋の『廣漢和辞典』によれば、「八大地獄の一。五逆罪を犯したものが絶え間ない苦しみを受けるという地獄。無間は苦しみの絶え間がない意。最も苦しい地獄。無間奈落。阿鼻地獄」とある。一步でも退こうものなら、この「無間地獄」に突き落とされるであつたらう。あの長島の惨劇を自分の一族郎党にふりかかるようなことをすれば、悔いても悔いきれない、その思いが後半の句を書かせたのであつたらう。私はこの言葉を徹頭徹尾、現世に生きようとする者の心構えと読みたい、と思った。

忠左衛門隊はこの旗ざしを船の舳先にかけて出陣した。戦闘は天正4年7月15日におこった。『信長公記』にこの日の決戦の様子が次のように記されている。引用しよう。

7月15日のことであった。中国筋安芸の水軍、能島某・来島通総・児玉就英・粟屋大夫・乃美宗勝という者が、大船七―八百艘を率いて大坂の海上に来航し、大坂方に兵糧を補給しようとした。

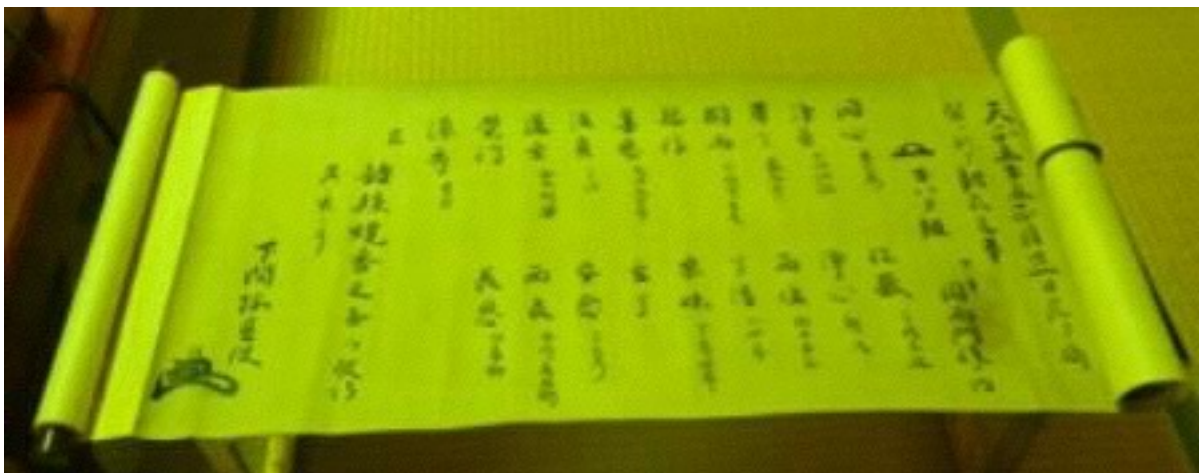
これを阻止しようと迎え撃ったのは、真鍋七五三兵衛・沼野伝内・沼野伊賀・沼野大隅守・宮崎鎌太夫・宮崎鹿目介、尼崎の小畑、花熊の野口。これらも三百艘を漕ぎ出し、木津川河口に防衛線を張った。敵は大船八百艘ほどである。互いに漕ぎ寄せて、海戦となった。

陸では、大坂の楼岸、木津のえったの城から一揆勢が出撃し、住吉海岸の砦に足軽勢が攻めかかって来た。天王寺から佐久間信盛が軍勢を出し、敵の側面を攻撃した。押しつ押しされる長時間の戦いであった。

そうこうするうちに海上では、敵は焙烙火矢というものを作り、味方の船を包囲して、これを次々に投げ込んで焼き崩した。多勢にはかなわず、真鍋・沼野伊賀・沼野伝内・野口・小畑・宮崎鎌太夫・宮崎鹿目介、このほか歴々多数が討ち死にした。安芸の水軍は勝利をおさめ、大坂へ兵糧を補給して、西国に引き揚げてしまった。

信長は出馬しようとしたが、既に決着がついてしまったというので、どうしようもなかった。（中川太古訳『信長公記』下巻、新人物往来社、25―6頁）

忠左衛門隊は「安芸の水軍」八百艘のうちの一艘であった。忠左衛門の旗ざしにこめた祈りが見事に成就したのであった。大坂に10万石の兵糧が届けられた。それを見届けたあと、水軍の本隊は、踵を返して西国に帰って行った。だが忠左衛門隊は大坂に残って、石山本願寺を守る陣営に加わる。そのあとどのような活躍をしたか、不明である。



その6か月後の翌天正5年正月21日、かれらは尼崎砦で討ち死にした。その法名簿が長善寺に届けられる。法名簿には忠左衛門の法名円心を先頭に19名の死亡した宗徒の名が2段で列挙され、「読経焼香」して供養するよう依頼の一文が下間按察使頼口署名で添えられていた。そこにはこう記されている。

天正五年丑正月廿一日尼ヶ崎砦ニ於イテ討死之事

キハタ組 アキ円西門徒ノ内

円心 忠左衛門／休庵 三嶋〇〇／浄音 上田内記／浄心 新八／専了 甚九郎／
西住村上与三／閑西 三嶋〇太夫／了清 小四〇／祐信／宗味 丁亭四郎／善應
友田又五郎／玄了／法真 〇〇／安念 三〇〇／道玄 和木刑部／西良 今川彦兵
衛／覚行／長音 太〇助／源秀 〇〇
右 読経焼香之条可被〇其意事 下間按察使 頼□

19名には法名がつけられている。だが苗字のある者、ない者、本名の記されていない者もいる。混乱している。だがそもそもこの時代、何千何万という死者についてその菩提寺に「読経焼香」を頼むということはふつうにあったろうか。おそらくこの部隊は、特別の役割を任じられた集団であったのだろう。それにしても尼崎砦は、知略に長けて当時もっとも行動的であった荒木村重に警固されていた。いわば難攻不落の砦攻めを任されたのか。

この旗ざしと法名簿を、だれが届けたのか、どのように届けられたのか、二つは一緒に届けられたのか、次々と聞きたいことが増えてくる。しかも忠左衛門率いるキハタ組は、これで全員だったのか。生き残った者はいなかったのか。

藤原忠左衛門隊は、本願寺中枢の下間頼□の直属あるいはそれに近い役を任されて戦った部隊であったろう。信長それから秀吉側から見れば、賊徒であり、かれらの菩提寺長善寺もまた逆賊の寺である。関ヶ原の戦いのあと、毛利輝元を長州萩に追放したあと、広島藩主に封じられた福島正則の軍勢は、広島入りの途次、旧山陽道沿いにあったこの寺を焼尽破壊して通過していった。同寺は入野に逃れ、その檀家も5軒、10軒と散りちりに逃げ延びるしかなかった。同寺はその後数度の火災に会いながら、明治初期にふたたび竹原に戻り、現在の東野に落ち着いて、今に至る。その間、この遺品は寺宝として守り伝えられてきた。東野では多くの新しい檀家に囲まれて、里山のような山容を背景に、穏やかな風景を醸し出している。先年、長善寺は屋根瓦、境内、庭園等を大改修した。その時の寄付名簿には、広島や東広島など、広島の各地に散らされた多くの往時の檀家の末裔が名を連ねている、と大内師から説明を受けた。その檀家の分布にも、寺が今に引きずる深い傷を感じた。

(6)

現在、藤原忠左衛門の少し若振りの鎧姿の銅像が、改修なった長善寺の本堂脇に建てられている。それは長善寺がかれを守本尊として、いかに大切にまつているかの証である。かれの、自分だけでなく一族の生への祈りが、450年以上を経た今にも伝わってくる。テレビの連続ドラマは、相変わらず信長だの、秀吉だの、家康だのの伝記を題材にしている。だが私はかれらではなく、むしろ藤原忠左衛門のような生き方が21世紀の手本になるのではないか、と思っている。